



4月 15日

こんにちは。いかがお過ごしでしょうか?

信じられないかもしれません、私は今、コーンウォール地方の、あるお城に住んでいます。どうしてだと思いませんか?

実は先日、あるイギリス人の貴族と婚約したのです。つまり、このお城が私の家にならというわけです。なんですからしいことなのでしょう。もう夢のようです。豪華な応接間のソファーでくつろぎ、紅茶を飲みながら優雅な話題に花を咲かせ微笑む自分の姿をときどき想像してしまいます。どうです?素敵だとと思いませんか?

私が卒業した後どうして故郷のケント州に戻らなかったのか、不思議に思われているでしょうね。でも、このまますぐには故郷に戻る事など考えられませんでした。私は、2~3ヶ月休暇を取った後、なにかセリガルのある仕事に就こうと決心しました。そんな折、一枚の求人広告を見つけました。コーンウォール地方のお城で、ジャック・トレシリアンという貴族の秘書がある仕事でした。そして、私は今、そのジャック卿のお城にいるのです。

ジャック卿は、私が想像していた人物とはまったく違って、若く堅実な男性でした。加えて、なかなかハンサム。はじめてあって時からすっかり彼の虜になってしまったのです。嬉しいことに彼も私に好感を抱いてくれたのです。もしも、彼が私に 관심を抱いてくれなければならぬ、私は崖から飛び降りて自殺していたかもしれません。

私たちは5月3日に、同じコーンウォール地方に住む貴族の人たちを招いてパーティを開き、そこで私たちの婚約を発表しました。あなたがここにいてくれてならば、きっと、どのフォークを使ってもよいのか教えてくれてでしょうわ。信じられないかもしれません、上流階級の人たちの中には、ものすごく地位の高い人がいて、晩餐会で場違いな服装で来ようものなら、もう二度と口を開いてはくれないのですよ。だけど、彼は他の貴族とは違って、たとえそんな失敗をしても、笑って済ましてしまうような、そんなユーモアのある人なのです。本当によかれてつくづく思いました。さんは彼だから、私は貴族社会の格式にどうわれずに、ありのままでいられるのです。

集った貴族の中の一人に、ボヘミア人がいます。ビビアン・ペントリースといって画家であり、彫刻家でもあります。彼女は、私たちの近所に住んでいて、50歳代というのに25歳のときと同じような美しさを保なえている女性なのです。彼女は、トレシリアン卿の先代、ライオネル卿の奥様でした。ビビアンの家族は、何代も前から、ここ、コーンウォール地方に住んでいますので、面白い昔話をたくさん知っています。

集った貴族の中の一人だけ気にならない人物がいます。リス・ベインという女性です。(彼女は、「よしとみんよから「リス・ベイン閣下」とひとと呼ばれているのです!)当然私が彼女の事を、みんよとおなじように呼ぶはずがありません。彼女はメイフェアの社交界でデビューし、誰とでもすぐにうちとけるので、ちょっと親しくなった一人でした。でも、彼女は少し非常識なところがあり、私という婚約者のいるジャックと、どうも密かに恋愛関係にあるようなのです。まあ、とがくお城という場所は、ロマンチックな出来事が生まれやすいところなのです……

ジャックの親友で、イン・フォーディスという男性がいます。コーレドストリーム衛兵隊の将校で、ながながのプレイボーイ。リスから聞いて話によると、インは、当時ジャックの恋人だったダイルドレ・ハムという女性と深い恋におらしまったそうです。ダイルドレは、インとの関係をやめようとしました。親友のインとも関係をもつようになつたダイルドレに、ジャックは苦しみ、とうとう我慢できず、彼女と別れてしまひました。

こんな出来事があつたにもかかわらず、ジャックとインとの友情にひびが入る事は「よかつて」そうです。そんな折、ダイルドレの身に恐ろしい事故が起きました。彼女はジャックとの恋の破局に動転し、このお城の井戸に落ちて亡くなってしまったのです。遺体は、とうとう発見されなかつたそうです。井戸の水はとても塩辛いので、たぶん地下は海につながっていて、彼女の遺体は海に押し流されてしまつたに違ひありません。ダイルドレの死は、お城へ住む召し使いたちの想像をかき立てました。その井戸の場所は、「白い貴夫人」と呼ばれている昔からの亡靈が、よく出没する場所だそうです。召使いたちの中には、最近居住用に改築した部屋で、その亡靈の姿を見たと言う人がいます。（亡靈といふものは、思い出のある古い場所に執着するといつますから、「白い貴夫人」も馴染みの深い場所を選んでしまう。）ところが、今回その改築した部屋に現れた亡靈は、まさしく彼女、ダイルドレだと言うのです。なんと恐ろしい事でしょう。ダイルドレの一家は、コーンウォール地方のあたりに呪われて、落ちぶれてしまいました。彼女の祖父であるボルダーカー氏もまた、最近異常に死に方をしています。彼は病氣にかかり、ロンドンのある博士のもとへ出向いていたそうです。その博士といふのは、植物からの成分を取り出すという奇妙な薬を研究している人です。でも、ジ推察のとおり、その薬の効き目はまったく見られませんでした。当然ですね。

その博士は、ウェンディッシュといって、ライオネル卿の親しい友人で、今でもときどき、このお城へ訪れます。そのためには、私はずっとするのです。でも彼がここに滞在したいと望むのならば、断わるわけにはいきません。誰もが、このお城を愛しているからです。

近々、旅行者用のパンフレットのコピーを送ります。（このお城は、週末になると一般公開するのです。）そのパンフレットを読んでら全てのことがわかるでしょう。パンフレットには、例の「白い貴婦人」の亡靈のことも書かれているのです。きっと旅行者の好奇心を駆り立て、訪れる人が増えることでしょう。

2階の見取図に書斎があります。私が、ジャックの仕事を手伝って、書類の整理をする場所です。ここには、ライオネル卿のコレクションである、書物や手書きの原本が置いてあります。

ライオネル卿もジャックと同じように、所有地や財産の管理をしていましたが、家で過ぎすといふことはありませんでした。彼は旅行好きで、世界中を周り、家族の財産を使い果たしてしまつたのです。最後の旅行の地は、南アメリカのアマゾン川流域でした。彼は、そこで致命的なヤングルの病氣にかかりてしまい、それから亡くなるまで、ずっとこのお城のベッドに寝たきりでした。彼の負債や薬代を払うために、お城の一般公開へ踏切ったのです。ライオネル卿の死後、ジャックがすべてを相続しましたが、今でもなお、実際に相続した財産と、ライオネル卿の財産とが合いません。ライオネル卿は、高価な財宝をこのお城のどこかに隠して置いたに違ひありません。もしも、私たちが、その財宝を見つけ出せなかつたときには、ライオネル卿の負債を返済するため、相続して家財や家宝のすべてを売らなければならぬのです。

古美術商のモンティュー・ハイドは、いつも、「よくが良い品物が入らないかとロンドンから来では、あちこちを見て回っています。本来なら私は、彼に対してもっと親切にするべきなのでしょうね。

別に、彼は意地の悪い人間ではないのですから。でも、彼と会うたびに、600年いいえ700年もの間、ずっと先祖代々大切に守り続けてきて、美しい家宝を、手放さなければならぬのかと思うと、どうしても好意的な態度はとれません。やはり、すべての財産は、永遠に私たちの手で守るべきですよね。

コーンウォール地方のこと、このお城のこと、そして高級貴族たちのふるまい奇妙な習慣など、話をすれば尽きないのですが、夕食の前に、ライオネル卿の書類をもう少し調べなければならぬので、この位にしておきましょう。この間ジャックにも言つたのですが、彼の妻には、とも、これからも書類整理の手伝いは続けるつもりです。だって、彼が他の女性を、私の代りに連れてきたら、不愉快であります。

最近「白い貴夫人」の話を聞いてから、どうも恐ろしくて落ち着きません。あなたがきてくださいれば、どんなにお気が休まる事でしょう。すぐにでも飛んで来ていてくださいのですが、遠方からの訪問にならるので強くはお願ひできません。とりあえず、返事だけでもすぐにいただけないでしょうか?

でも、もしよしければ、ぜひおいでください!「亡霊屋敷」に滞在するチャンスないで、めでたさりあります。

愛をこめて タマラより

